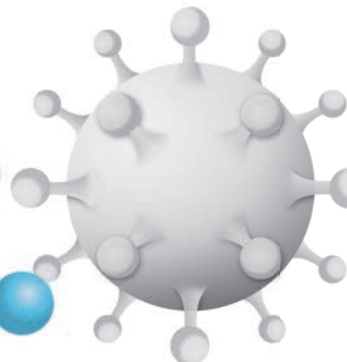


特集 感染症の世紀を行く



ポスト・コロナを見据えて

ここまで長く厳しい戦いになることを、どのくらいの人々が予想したでしょうか。ハーバード大の研究チームは、人と一定の距離をおくソーシャルディスタンスングを、2022年まで続けなければならなくなる可能性を示したうえで、COVID-19を完全に撲滅した場合でも、2024年までには再

び流行するおそれがあるとしみました。来夏に延期された東京オリンピックの開催も、予断を許さない状況です。

今回のような世界規模の感染症リスクの脅威は、かねてから指摘されてきました。人類史上類をみないグローバル化の進展により、世界はフラットではないにせよ、小さくなったことは確かでしょう。情報やカネはもとより、人、モノの物理的な移動も、たとえば2000年代初頭に始まったSARS(重症急性呼吸器症候群)の流行時と比べても爆発的に増えています。

かつてはエンデミック(特定の地域や集団で継続的に発生する風土病)にとどまっていたものが、エビデミック(限定的な流行状態)となり、やがてパンデミック(世界的な大流行)に進展する。その可能性とスピードは、これまで人類が経験したことのなかったものといえるでしょう。

世界的な感染症リスクがさほど問題とならなかった時代に後戻りすることはできません。次の新型コロナウイルス感染症が、いつどこで発生して世界を襲うのかを

予測することも今のところ不可能です。ただ、感染症の世紀を生きているという理解さえあれば、これに抗う知恵と思慮深さを身につけることはできるはずです。

今回の特集で論じられているセキュリティと生産性の両立を目指すテレワークや、柔軟でしたたかなサプライチェーンは、これからのスタンダードになっていくと考えられます。また、信ぴょう性の低い情報やデマに惑わされず、一方で企業として正しい情報を発信するためには、これまで以上に高度な情報リテラシーが必要とされるでしょう。

こうした前を向いた取り組みは、場合によっては事業や取引関係の見直し、人員の再配置などを伴うこととなります。変化に対応するのは企業にとっても働く人にとっても決して楽なことではありませんが、変異を繰り返しながら生き延びるウイルスと闘うためには、こちらが先に音を上げて足を止めるわけにはいきません。新たなスマートさを獲得し続けること。それが、未知の感染症や未曾有の危機に勝利する最良の方法なのかもしれません。